畳語の諸機能

禹　昊穎

［キーワード：①畳語　②複数　③累積的複数　④反復　⑤強調］

0. はじめに

我々が事物と事態を認識する際、〈空間〉と〈時間〉という対照的な二つの概念は異なった様相を呈するものである。その〈空間〉と〈時間〉とを〈数〉(number) の観点から考えてみると、どのような違いが見えてくるのであろうか。

空間的な存在として特徴づけられる〈モノ〉の数的異なりが問題となり得る典型的な状況とは、空間の中に明確な輪郭によって自らの周囲とは不連続な形で限定された個体が存在するような場合である（池上(2000)）。このような場合、空間的な存在としてのモノの明確な〈個体性〉(individuality) が不可欠な要因となる[1)]。

数の区別は、例えば英語では、

（1）　a. There *is* a book on the desk.
　　b. There *are* books on the desk.

のように、問題となる個体が一つか、あるいは二つ以上なのかによって、〈単数〉(singular) と〈複数〉(plural)という形をとって現れ、このような

二項的体系は、〈数〉の区別をする言語においてもっとも基本的な区分の仕方である[2)]。

ところで、時間的な存在として特徴づけられる〈コト〉は、時間の流れの中でのみ存在するため、一見〈モノ〉のような認知的顕著さが希薄であるとも思われるが、〈コト〉の数とは、どのような操作によって捉えられるのであろうか。池上（2000）は、その一つの可能性として「〈コト〉を〈モノ〉として捉え、時間的な〈回数〉を空間的な〈個数〉に読み替える」（p. 143）という〈実体化〉(reification, hypostatization) と呼ばれる認知操作を挙げており、また、このようなことは「程度の差こそあれ、どの言語にも多かれ少なかれ見出せる現象である」（p. 143）と述べている。例えば、時期的に隔てて生起した二つ以上の出来事がある場合（下線は引用者）、

（２）a. Their *conclusions* contradicted each other.

b. The two *earthquakes* were the heaviest in history.

（池上，2000：143）

このように表現できるのは、〈実体化〉による〈コト〉の〈個数〉化という現象があるからである。要するに、〈コト〉の数とは、時間の流れの中で状況の変化によって生ずる〈コト〉の存在をいわば〈出来事〉(event) という概念として捉え、「時間的な〈回数〉を空間的な〈個数〉に読み替える」という変換によって可能となるということである。

このことを念頭に置いて、本稿では、現代日本語における〈畳語〉(reduplicated words) といったものを取り上げ、それによる諸機能について少し考えてみることにする。また、安藤（1935）の言う「縮小義」について、中国語の動詞の畳語形を取り挙げて少し触れることにする。なお、本稿で扱う資料は、（基本的には）村上春樹の『1Q84』Book-１・Book-２・Book-３の３冊から採集したものである[3)]。

1.〈コト〉の数の表わし方

日本語の〈複数〉表示として用いられる「たち」は、原則的として、「人称代名詞」および「人間名詞」につくことができ、無生名詞にはつかないとしばしば言われている（仁田（1992：596）、松本（1993：36））[4]。しかし、「鳥たち」や「花たち」のような「《生物名詞》にまで付加されうる傾向が出てきている」（仁田（1992：596）との指摘もあり、これらを併せて考えてみると、「たち」は〈有生性〉(animacy) のものに限定されるといえよう。そうすると、二つ以上の出来事を表す場合、例えば、「日たち」や「日ら」のような表現は許されない。この場合、日本語では（3）のように同一語基を重ねる、いわば〈畳語形〉(reduplicated form) で表す（下線は引用者）[5]。

（3）a. 青豆は小学校五年生のときに心を決めて両親と袂を分かち、母方の叔父の家にやっかいになった。叔父の一家は事情を理解し、家族の一員として暖かく迎えてくれたが、それでもやはりそこは他人の家だった。彼女はひとりぼっちで、情愛に飢えていた。生きていく目的や意味をどこに求めればいいのかわからないまま、つかみどころのない<u>日々</u>を送っていた。

（1Q84－1：293）

b. しかし病原菌は生きていますし、<u>刻々</u>自らを強化し、進化しています。（1Q84－2：140）

c.「そうですか、それはいけません。眠れない夜というのは<u>往々</u>にして、人につまらないことを考えさせるものです。いかがです、しばらくお話ししてよろしいでしょうか？」（1Q84－2：133）

d. 女教師は肯いた。「何度もあります。信仰の迫害があるということで、ご両親は<u>度々</u>学校に抗議にみえました。

（1Q84－3：207）

e. 天吾はその前、十月に二度ばかり、休みの日に日帰りで千倉の療養所を訪れていた。早朝の特急に乗ってそこに行き、父親のベッドのそばに座り、時々話しかけた。しかし応答らしきものはなかった。（1Q84－３：54）

以下では、このような畳語形という形態論的な〈有標〉(marked) 化により得られる効果とは、どのようなものであるのかについて、少しばかり考察を巡らせてみる。

2. 畳語の諸効果

具体的な分析に入る前に、本節では、その背景として、畳語形にすることによって得られる諸効果について若干触れておくことにする。

〈重複〉(reduplication) とは、世界中のあらゆる言語に見られる〈造語法〉(word formation) の一種であるが[6]、その中には同じ二つの語基の重複によって形成される〈畳語〉といったものがある。畳語が単なる「同一語基の反復」であるとするならば、それはMartinet (1962, 1970) の言う〈言語の経済性＝最小労力〉(economy of language)[7] に反する言語行為になるであろう。しかし、畳語形にすることによって得られる効果について考えてみると、畳語は単なる「形態の反復」ではないことが分かる。例えば、Jespersen (1925: 217-218) には “reduplication” について、次のような一節が見られる（太字による強調、下線は引用者）。

Common to all mankind again is a fondness for **reduplications**. There are various kinds of them, from the case in which the whole word is repeated to the strengthen the effect (‘very, very glad’, ‘this too too solid flesh’) to many weakened forms, in which only the first syllable, or a single sound, is duplicated.

> **加重形**を好むのは、又全人類に共通である。効果を強める爲に、語全體が繰返される場合（very, very good「極、極上等な」、this too too solid flesh「このあまりに、あまりに硬い肉」）から、最初の音節或は一個の音のみが、加重されてゐる多くの弱い形に至る迄、色々な種類の加重形がある。（須貝・眞鍋（訳）, 1944：305）

即ち、語が繰返されると効果が強まることになる、ということである。その効果については、既に様々な観点から論じられており、例えば、Sapia (1921: 79) には “reduplication”について、次のような記述が見られる（太字による強調、下線は引用者）[8]。

> Nothing is more natural than the prevalence of **reduplication**, in other words, the repetition of all or part of the radical element. The process is generally employed, with self-evident symbolism, to indicate such concepts as distribution, plurality, repetition, customary activity, increase of size, added intensity, continuance.

> **重複**、言いかえれば、語幹要素の全部または一部を反復する方法が広くおこなわれていることほど、自然なことはない。この過程は、一般に、自明なシンボリズムによって、分配、複数、反復、習慣的動作、大きさの増加、強度の増大、継続などの概念を表すために用いられている。（安藤（訳）, 1998：131）

以上を簡単にまとめると、畳語は、言語の違いを超えて普遍的に観察される語形成の手段の一つであり、またそのような形態論的な有標化によっていくつかの効果が得られる、ということである。ただ、それが各言語にどの程度組み込まれているかは、言語によって異なり得るわけである。

3. 日本語の畳語について

前節で触れたことを念頭に置いて、日本語の畳語について少し考えてみよう。日本語の畳語形はオノマトペ語彙、語形として最も多いと言われており（角岡（2007）、窪薗（2002））、また、それに関する研究は盛んに行なわれているが、本稿では、さほど触れられていないオノマトペ語彙以外のものを取り挙げて検討する[9)]。

先ず、日本語の畳語には、どのような意味用法やどのような構成パターンがあるのかを、先行研究を概観し整理しておく。前節で、畳語は各言語によって組み込まれている程度には差があり得ると述べたが、それは次に引用した安藤（1935）の洞察からも容易に確認できる。安藤（1935：９-13）は、畳語は意義的には（下線は引用者）、

（ｉ）強意的 ｛ ほとほと（殆）、うとうとし（疎）、にくにくし（憎）
　　おやおや、まあまあ

（ii）縮小義

（iii）事物の複数や状態の継続・反復

（iv）比較の意味

の四つの意味を表すと述べ、（ｉ）と（iii）は日本語に、（ii）はインドネシア語族（例えば、Makassar 語や Dayak 語など）に、（iv）は Samoa 語や Maori 語に見られると指摘している（「縮小義」については７節で再び言及する）。このうち、（iii）については、次のように説明が続いている（下線は引用者）。

> 國語の、「いへいへ」（家々）・「やまやま」（山々）・「くにぐに」（國々）・「てらでら」（寺々）のやうな名詞をかさねた例はいふまでもなく、「ありありて」・「行き行きて」・「いひいひ」・「いふいふ」の如き動詞の畳語、「ことごと」・「しばしば」・「やうやう」のやうな副詞、さては「つ

つ」の如き助動詞の疊語、「まま」の如き、疊語で品詞所屬が問題となつてゐるのなどはみなこの種類として數へられるやうである。

（安藤, 1935：12）

要するに、品詞の種類が関わっており、名詞の畳語は「複数」を、それ以外は「継続・反復」を表す、ということである。また、このような分類は、秋元（2005）や石井（2007）にも受け継がれている。

秋元（2005：243）は、構成パターンと意味について、次のように分類している（下線は引用者）。

a. N＋N → 複合名詞：多数性を表す。（人-びと、家-いえ、村-むら）
b. N＋N → 複合名詞：頻度を表す。（時-どき、常-づね、日-び）
c. V（用）＋ V（用）→ 複合副詞：シナガラ・シツツの意味を表す。（泣き-なき、生き-いき、思い-おもい）
d. A（幹）＋ A（幹）→ 複合副詞：強調の意味となる。（ちか-ぢか、ひろ-びろ、くろ-ぐろ）

また、石井（2007：171）は、日本語の和語の畳語の主な形成パターンと構造（意味）を次のように分類している（下線は引用者）。

①名詞を重ねて多数性を表す名詞とする。（人々、山々、木々、家々）
②名詞を重ねて時を表す副詞とする。（時々、常々、日々、しばしば）
③動詞の連用形を重ねて継続や反復を表す副詞とする。（泣き泣き、休み休み、思い思い）
④動詞の連用形を重ねて様子を表す副詞とする。（生き生き、散り散り、のびのび、晴れ晴れ）
⑤ク活用形容詞の語幹を重ねて強調の意味を表す副詞とする。（広々、黒々、寒々、高々、近々）

⑥副詞を重ねて副詞とする。（まだまだ、まずまず）
⑦感動詞を重ねて感動詞とする。（あらあら、まあまあ）

以上の記述を大雑把にまとめるならば、日本語の畳語には〈複数〉・〈反復〉[10]・〈強調〉の三つの意味用法があるが、それらは（例えば、名詞は〈複数〉、動詞は〈反復〉、形容詞は〈強調〉を表わすという記述からも分かるように）単語の種類と密接な関係をもっているといえよう[11]。

ところが、〈複数〉に関しては異なる見解も見られる。例えば、『岩波国語辞典』（2009：1625-1626；以下、『岩波』と記す）では、畳語を「形式上」・「意味上」の観点から、

（一）体言を重ね、反復して考えられる同類を指す。
（二）動詞の連用形を重ね、～シツツのような意を表す。
（三）（外的）状態を表す形容詞語幹などを重ね、その状態が単発的でなく成り立っている意を表す。

のように「名詞の重複」、「動詞の重複」、「形容詞の重複」の三つに分類している。また、意味的共通点は「対象とする物・事柄・状態を繰り返し考えているところにある」（p. 1626）と述べているが、「名詞の重複」については、さらに次のような記述が続いている（太字による強調、下線は引用者）。

よく誤って**複数**を意味すると説かれるが、正しくない。もし複数なら、集落の中の二軒だけが旗を立てていても「家々に旗が立ててある」と言えるはずであるが、この表現はむしろ各家というのに近い。「家また家」という**反復**であり、（二）や（三）もこの**反復**という観点から説明できる。（『岩波』, 2009：1626）

要するに、名詞の畳語は〈反復〉が最も重要な意味特徴である、ということである[12)]。また、「各家というのに近い」という記述から、『岩波』は指示対象の〈個別性〉を問題にしているように思われる。しかし、『岩波』の記述には次のような素朴な疑問も感じる。

『岩波』の言う「もし複数なら、集落の中の二軒だけが旗を立てていても「家々に旗が立ててある」と言えるはずである」という指摘の背後には、おそらく〈部分〉と〈全体〉、または〈特定〉と〈不特定〉に関わるような問題が絡んでいると思われるが、この点を含めて「名詞の畳語」に関して、果たして説得力のある説明が可能になるのか、ということである。以下の用例を見てみると（下線は引用者）、

（４）彼は観光地にも遊園地にも行ったことがなかった。日曜日は朝から夕方まで、父親とともに知らない家々のベルを押し、出てきた人に頭を下げて金を受け取った。（1Q84－１：167）

（４）に用いられる「家々」は、「異なる時点と関連して成り立っている」考えるならば、確かに『岩波』の言うように、〈反復〉と解せるであろう。しかし、例えば（下線は引用者）、

（５）a. 父方の祖父は福島県の出身で、その山の中の小さな町だか村だかには、青豆という性をもった人々が実際に何人かいるということだった。（1Q84－１：12-13）

b. どうしてかと言いますと、世間にはエネーチケーの受信料を払うまいと心を決めた方々がたくさんおられるからです。（1Q84－２：98）

c. ところが、雨期のさなかに、ある夜突然雲が切れ、星々が輝くのが見える。（1Q84－３：106）

の「人々」「方々」「星々」は、（４）の「家々」とはやや異なる趣が感じられるであろうが、『岩波』の定義に従うならば、〈反復〉を表すことになる。果たしてそれでよいのか。畳語の機能に立ち戻って見返してみると、〈反復〉に偏ってしまった観点からは、むしろ合理的な説明は得られないのではないか。

このように考えてくると、〈複数〉と〈反復〉とを截然と分けることはできず、また〈強調〉も併せて慎重な検討が必要になる。以下では、日本語の畳語に見られる〈強調〉についてごく簡単に触れ、日本語の名詞の畳語に見られた〈複数〉と〈反復〉とに関する見解の相違をどのように考えればよいのか、また、それはどうして生じるのかといったことを、具体例を手がかりにして、言語を話す主体との関連で少しばかり考察してみることにする。

4. 強調

先ず、〈強調〉(emphasis) からごく簡単に見ておこう。次の例文を見られたい（下線は引用者）。

（６）a. 「私は<u>常々</u>、見かけだけで人を判断したくないと思ってるの。それで失敗して後悔したことが前にあるから。　（1Q84－２：55）

b. 老婦人は慎重に言葉を選ぶ。「私は<u>前々</u>から、あなたを冷静で、論理的な考え方をする人だと思ってきました」

（1Q84－３：160）

（７）a. ふかえりは鍵のかかっていない玄関の戸をがらがらと開けて中に入り、天吾についてくるように合図した。二人を出迎えるものは誰もなかった。いやに<u>広々</u>とした静かな玄関で靴を脱ぎ、磨き上げられたひやりとした廊下を歩いて応接室に入った。　（1Q84－１：209）

b. 児童公園に着いたのは七時七分前だった。あたりは既に暗く、水銀灯がむらのない人工の光を狭い公園の隅々に注いでいた。
（1Q84－３：548）

これらに見られる「常々」・「前々」や「広々」・「隅々」は、どのようなはたらきをしているのであろうか。これと関連し、安藤（1935：９）には次のような記述が見られる（太字による強調、下線は引用者）。

畳音・畳語が、どうして言語の上にあらはれて来るかについては、種々の説明がつくが、まづ第一に、それは印象の反復がその印象を**強める結果**になるといふことと關係をもつ。繰返される周圍の對象が**話者**に強い印象を與へ、その強い印象は、音の反復、語の反復によって表現される。すなはち畳音・畳語の表現は、本来、**強意的**のものなのである。

上記の記述を念頭に置いて考えてみると、「常々」・「前々」や「広々」・「隅々」などは、話者の「事象・事物」に対する、いわば「時空数量」[13]の〈強調〉の現われであると言えよう。この〈強調〉は、既に触れた秋元（2005）や石井（2007）の（形容詞語幹の畳語形は〈強調〉の意味を表す、という）分類からも容易に見て取れるが、それとは異なる点は、形容詞語幹の畳語形以外にも強調の意味が存在するという事実である。また（下線は引用者）、

（８）a. 髪は薄くなりかけているが、顔立ちは若々しい。（1Q84－１：345）
b. 大型トラックが強力なヘッドライトを抜け目なく路上に光らせていた。その向こうにある海は泥のように黒々としていた。
（1Q84－２：207）
c. 煙を深々と吸い込んだ。しかし煙草には味がなかった。
（1Q84－３：376）

に見られる「若々しい」「黒々」「深々」などは、話者の「事物の様子や在り方」に対する、いわば「様態」の強調の現れであり、（６）（７）のそれとは性格を異にするものと思われる[14)]。

以上のような検討から窺えることは、上記の畳語に見られる〈強調〉の意味合いは、秋元（2005）や石井（2007）の指摘のように、単語の種類（形容詞）によって決まるという解釈も出来なくはない。しかし、それだけでは合理的な説明は得られず、上に引用した安藤の「繰返される周圍の對象が話者に強い印象を與へ、その強い印象は、音の反復、語の反復によって表現される」という指摘を踏まえ、話者の主体的な観点から捉え直してみると、〈強調〉は外界に対する話者の積極的な捉え方の反映であり、さらにそれを「時空数量の強調」と「様態の強調」とに分けることによって、より仔細な分析が可能になると思われる。

5.〈複数〉と〈反復〉をめぐって

３節では、従来の記述を概観し、日本語名詞の畳語形に見られる〈複数〉と〈反復〉との見解の相違について確認した。〈複数〉と〈反復〉をめぐる解釈の背後には、いったいどのようなものが潜在しているのか、本節では、それについて少しばかり立入って触れておくことにする[15)]。

5.1　同質性

ここでは、〈複数〉と〈反復〉とに関わると思われる〈同質性〉(homogeneity) について、ごく簡単に見ておく。

日本語の畳語形（例えば「人々」･「家々」や「日々」･「月々」など）は、ある共通性をもとに同類のものとして括り、その括られたものは「人、人、…」･「家、家、…」や「日、日、…」･「月、月、…」のように〈同質〉(homogeneous)[16)]のもののみの集合を指し示す。また、この点において（下線は引用者）、

（9）a.「あの人たちって誰のこと？」と天吾は尋ねた。

（1Q84－1：183）

b. 太郎たちが来た。

のように、〈同質複数〉や〈近似複数〉[17]の両方の機能をもっている「たち」とは性格を異にする[18]。日本語の名詞の畳語に見られる〈複数〉と〈反復〉は、指示対象の〈同質性〉に基づいた分析であり、言い換えれば、〈同質性〉は〈複数〉と〈反復〉といった畳語形の意味特徴にとってきわめて重要は役割を果たしていると言えよう。

5.2 〈モノ〉の数

日本語の〈数〉(number) 概念の表示に関する従来の研究を概観してみると、印欧語や英語のような〈数〉という文法範疇を持たないためか、日本語研究ではさほど重要視されてこなかったような印象を受ける（金田一（1988）、大江（1972）、玉村（1986））[19]。しかし、仁田（1992：605）は日本語の名詞の〈複数性〉(plurality) を表す方法には「畳語形」と「複数性を意味する接辞を付加された形態」とが存在すると述べ、前者については「常に指示対象の複数（多数）性を表」(p. 604) すという説明を付け加えている。

また、「畳語」については、『言語学大辞典』（1996：713）にも次のような記述が見られ（太字による強調、下線は引用者）[20]、

[…]、語そのものを反復させてある文法的価値を与えることがある。たとえば、日本語の「**人々**」とか「**山々**」など。これを「畳語」という。この例は**複数**を示す。

３節で触れた安藤（1935）、秋元（2005）、石井（2007）や（注11で触れた）角岡（2007）、窪薗（2002）などの指摘をも併せて考えてみると、空間的に共在する〈個体〉を表わす名詞の畳語形は〈複数〉を表すこと

になる。この点について具体例を見ながら、もう一歩立入って考えてみたい。例えば（下線は引用者）、

（10）a. 人々は彼女かハイヒールを脱ぎ、それからコートを脱ぐ様子を無言のまま見守っていた。（1Q84－１：27）

b. 十月十六日には北海道夕張の炭坑で大きな事故が起こった。地下千メートルの採掘現場で火災が発生し、作業をしていた五十人以上の人々が窒息死した。（1Q84－１：191）

c. しかし彼らは僕らに対して何もできなくても、そのかわりに、僕らのまわりにいる人々に対して何かをすることはできる」と天吾は尋ねた。（1Q84－２：266）

d. ハイヒールを履いて大股で高速道路を歩いていく彼女の姿を、人々は黙って眺めていた。（1Q84－３：39）

（10）に見られる「人々」は、空間的に共在する指示対象に焦点を当てて「数の多さ」を表わすために用いられており、〈時間〉の継起を問題にしてはいない。したがって、上記の用例の「人々」の出来に関わる客観的な状況は〈同時的〉な解釈が強くなるという印象を受けるであろう。ならば、指示対象の〈数〉を、「時間の推移」と関連づけて考えてみると、どのような展開の可能性が考えられるのであろうか。

5.3　累積的複数

ここで、〈モノ〉の数を〈コト〉と関連づけて少し考えてみよう（下線は引用者）。

（11）a. 『さきがけ』農場の評判を耳にし、そこに加わりたいと希望してやってくる人々も増えてきた。（1Q84－１：226）

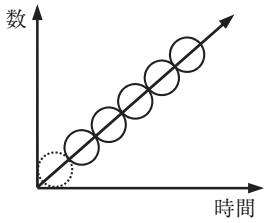
b. 三日目の夜に、山羊が大きく口を開けた。その口は内側から押

し開けられたのだ。そしてそこから小さな人々がぞろぞろと出てきた。全部で六人。（1Q84－２：402）

c. そのカメラで午河は、玄関を出入りする人々を何人かためしに撮影してみた。（1Q84－３：264）

d. 玄関の照明が灯り、その黄色い明かりの下を通過していく人々を牛河は監視し続けた。（1Q84－３：264）

上記の（11）と先ほどの（10）の間には、やや異なった趣が感じられるであろう。それは何かと言えば、既に若干触れたように、〈継起的〉な（つまり、時期を隔てて生ずるという）解釈が見出せるか否かということである。（10）の「人々」は、その出来に〈同時的〉な解釈が強かったのに対し、（11）の「人々」は、出来事の内部に存在する指示対象が時間の流れとともに漸次的に現れており、簡単化していうならば、〈累積的〉(cumulative) な解釈が強い。即ち、継起的に現れる指示対象のつみかさなった結果を表すという意味合いが込められているということである。以下、このような複数概念を〈累積的複数〉(cumulative plural) と呼ぶことにする。



〈図.1〉累積的複数

このような点を念頭に置いて、再び（12）の「家々」を見てみよう（（４）再掲）。

（12）　彼は観光地にも遊園地にも行ったことがなかった。日曜日は朝から夕方まで、父親とともに知らない家々のベルを押し、出てきた人に頭を下げて金を受け取った。

３節では『岩波』の（「家々」は「反復」を表すという）指摘を考慮し、「異なる時点と関連して成り立っていると考えるならば、〈反復〉と解せるであろう」と述べたが、このように考えてくると、『岩波』の指摘の背後には、実は〈継起的〉な意味合いが込められており、これまでの議論から言うならば、（12）の「家々」は〈累積的複数〉を表わしている、ということになる。

要するに、「モノ」の〈累積的複数〉とは、裏を返せば、本来〈時間〉の意味合いを含んでいないところに時間軸を組み込ませようとする認知的な操作が加えられたものであるといえよう。このことを念頭に置いて、〈コト〉の数について考えてみると興味深い。

5.4 〈コト〉の数

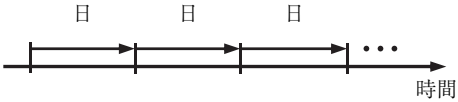
時間の流れの中で状況の変化によって生ずる二つ以上の〈同質〉の出来事は、それぞれ多かれ少なかれ何らかの時間的な幅（生起･進行･完了）をもっている。例えば、「日」はそれがもつ〈単位〉(unit) としての性質のため、周囲とは不連続に限定された存在であり（下線は引用者）、

（13）a.「私には日々の生活を送っていくのがやっとなの。ボーイフレンドと遊んでいるような余裕はない」　（1Q84－１：297）

b. 小説の執筆を日々続けるかたわら、頼まれていた雑誌用の短い原稿をいくつか書いた。　（1Q84－１：498）

に見られる「日々」は、実は連続的に蓄積されて現れるものである。それは、先ほど見た〈同時的〉な解釈は希薄であるという事実からも容易

に理解できる。仮にこれを、一次元的に捉え直して図示すると、〈図. 2〉のようになる。



〈図. 2〉コトの境界

こうして見ると、〈コト〉の継起的な変化は、一見出来事の順序を単に羅列しているかのようにも思われ、「繰り返しを表わす」(注15参照)〈反復〉とも解せるであろう。ただし〈コト〉の場合は、既に触れたように〈実体化〉という操作が加わっており、したがって〈出来事〉に関連する時間の次元は消えてしまい、まるで空間に共在する〈個体〉であるかのように捉える、という認知的な操作が加えられることになる(池上(2000))。

しかし、〈モノ〉と〈コト〉を較べてみると分かる通り、「時間を消去する」という操作には差があり得るのである。それは、〈コト〉を表わす名詞は本来〈時間〉を含意しているため、池上(2000)の指摘のように〈実体化〉という認知操作が加わったとしても、それを完全に消去することはできず、同質のものがつみかさなるという〈反復〉として捉えてしまうということが起るからである。

このように考えてくると、名詞の畳語形を〈複数〉として捉えたり、〈反復〉として捉えたりするという経験的事実に関わる重要な要因は、〈時間〉という次元の介入の有無に求められ、言い換えれば、それをどのように扱いどう処理するかとった、言語話者の認知の仕方が深く関与しているということになる。

6.〈複数〉から〈量〉へ

ここでは、〈複数〉の派生的な用法について少し取りあげておく。池上(2000：163)は、文法的なカテゴリーとして〈数〉をもつ英語のよ

うな言語において「〈複数〉が〈数〉の多さではなく、〈量〉の多さを表わしていると思える場合がある」と指摘し、次の用例を挙げている（下線は引用者）[21)]。

（14）a. the *snows* of Kilimanjaro （池上, 2000：163）
b. the *sands* of the desert
c. sailing on the great *waters*

さらに、「これらの使い方はいくらか詩的な漢字を伴う表現とされるようであるが、‘sands’という複数形が〈砂漠〉を意味する使い方などは、間違いなくこうした用法の延長として生じたものであろう」という解説が続いている。

英語に見られるこのような〈複数〉から〈量〉への転化は、日本語名詞の畳語形にも見られる。例えば「山々」は、「峠から山々を眺める」といった場合は、「多くの山」や「あちらこちらの山」を表わすが（下線は引用者）、

（15）「これからお散歩ですか。歩くのは健康によろしい。お天気もいいですし、せいぜい楽しんでいらっしゃい。私だって手脚を伸ばしてのんびり散歩したいのは山々なんですが、残念ながらここに座り込んで、このろくでもないアパートの入り口を日がな見張ってなくちゃならんのです」 （1Q84－３：383）

に用いられている「山々」は、字義通りの〈複数〉を表すのではなく、気持ちの〈量〉の多さを強める意味合いを表わしている。しかし、〈複数〉と〈量〉の境界線が曖昧になる場合がある。例えば「ほしいものは山々あるけど」という表現の「山々」は、〈量〉にも、〈数〉にも関わっていると思われるが、いずれにせよ、これは４節で触れた〈強調〉につながる用法であると言えよう。

7.〈縮小義〉について

本節では、3節で触れた安藤（1935）の「縮小義」に関連し、中国語の動詞の畳語形を取り上げ、少しばかり考えてみることにする[22]。安藤は「縮小義」について、次のように述べている（下線は引用者）。

> インドネシア語族において、Makassar 語で、balla は「家」で、balla-balla は「小家」、Dayak 語の karahak は「残り」・「はした」などの義で、karaharahak は「少しの残り」・「ほんのはした」といふほどの義、Bugi 語では、bulu が「山」、bulu-bulu が「小山」である。かういふ縮小義を示すものは、南方語にばかりでなく、北方語にも見出される。［…］　（安藤，1935：11-12）

要するに「縮小義」とは、インドネシア語族に主に見られ、同じ語基を重複すると、元来そこには含まれていない「時間、事物の量や程度がわずかである」という意味あいが生ずることを指す、ということである。この点を念頭に置いて、朱（1982）の中国語における動詞の畳語形に関する記述を見ると興味深い。朱（1982：66-68）は、中国語の動詞の畳語形について（太字による強調、下線は引用者）、

> 概括地说，**动词重叠式表示动作的量**。所谓动作的量可以从动作延续的时间长短来看，也可以从动作反复次数的多少来看。前者叫做时量，后者叫做动量。［…］**因为重叠式动词表示短时量**，所以用在祈使句里，可以使口气显得缓和些。［…］重叠式动词除了表示时量短之外，有时**表示动量小**。［…］重叠式动词前边可以加上“多”“常常”等修饰语，这个时候，**重叠式仍旧表示时量短或动量小**。

総じて言えば、重畳型動詞は**動作の量を表す**。ここでいう動作の量と

は、動作が継続する時間の長短から見ることもできれば、動作が繰り返される回数の多少から見ることもできるのである。前者を時量と呼び、後者を動量と呼ぶ。［…］重畳型動詞は**少ない時量を表す**ので、命令文に使うと口調を柔らかいものにすることができる。［…］重畳型動詞は時量の短さを言う以外に、**動量の少なさ**を言うことがある。［…］重畳型動詞の前には“多”［多く］、“常常”［しばしば］などの修飾語を加えることができる。この場合も、重畳型はやはり**時量の短さあるいは動量の少なさを表す**。　（杉村（訳），1995：81-84）

と述べており[23]、動詞の畳語形は（以下、「時量」と「動量」を「量」と記す）「量の縮小」を表すと指摘している。このような用法は、先ほどの安藤のいう「縮小義」につながるものと思われる。この点に関して、具体例を取り挙げるならば（下線は引用者）、

（16）a. “我只是问问。没有就好。”　（book－1：239）

wǒ　zhǐshì　wènwèn　méiyǒu　jiù hǎo

I　only　ask　not so　good

b.「ただちょっと訊いただけ。なければいいんだ」とあゆみは言った。それから話を換えた。「ねえ、これまで恋人を作ったことはある？つまり真剣につき合った人ってことだけど」

（1Q84－1：339）

（17）a. “给我一点时间。那么什么‘新日本学艺振兴会’，让我查查看。

（book－2：36）

gěi　wǒ　yīdiǎn　shíjiān　nàme　shénme　xīnrìběnxuéyizhènxīnghuì　ràng wǒ　cháchá　kàn

give me a little time　that　something N·J·F·A·S·A [24]　let　me check try

b.「少し時間をくれ。その『新日本学術芸術振興会』なるものを俺の方でちょっと調べてみる。何かかわったらこちらから連絡する。しかしその牛河という男はとにかく、天吾くんがふかえりと繋がりのあることを知っているんだな」　（1Q84－2：57）

(18) a. “我到外边走走。”天吾说。 (book－2：269)

wǒ dào wàibian zǒuzǒu Tīanwú shuō

I go to outside walk Tengo talk

b.「少し外に出てくる」と天吾は言った。 (1Q84－2：383)

(19) a. 我说天吾君，我只是随便想想哦，这种假设能不能成立呢；

(book－3：250)

wǒ shuō Tīanwújūn wǒ zhǐshì súibiàn xiǎngxiǎn go zhè zhǒng jiǎshè néngbùnéng chénglì ne

I talk Tengo I only casual think-PART[25] this kind assume can tenable-PART

b.「なあ、天吾くん。ちょっと思ったんだが、俺たちが目にしているふかえりが実はドウタで、教団の中に残っているのがマザだという仮説が成り立たないだろうか？」 (1Q84－3：366)

のようなものが挙げられる。以上の用例に見られる中国語の動詞の畳語形は、「ちょっと」や「少し」が用いられている日本語の原文からも理解できるように、「量の縮小」を表していると考えられるため、先ほど触れた朱の記述と併せて考えてみると、安藤の言う「縮小義」は、中国語の動詞の畳語形にも生じうると解することができる[26]。

しかし、朱説については、なお考えるべき問題が潜んでいる。仮に、中国語の動詞の畳語形が「量の縮小」を表わすとするならば、例えば次のような用例に見られる動詞の畳語形は、いったいどのように説明すればよいのであろうか（下線は引用者）。

(20) a. 你回家好好地问问自己吧。 (book－1：32)

nǐ huíjiā hǎohǎode wènwèn zìjǐ ba

you gohome to one's heart's content ask oneself-PART

b. うちに帰って自分の本心をじっくり確かめてみるといい。鏡の前に立って自分の顔をよく眺めてみるといい。顔にしっかりとそう書いてあるぜ」 (1Q84－1：55)

（21）a. “谢谢。听你这么一说，我就放心啦。” （book－1：199）

xièxiè tīng nǐ zhème yī shuō wǒ jiù fàngxīn la

thank listen you so a bit say I feel relieved-PART

“喂，我们昨天夜里都干了些什么，你不想详细听听吗？”

wèi wǒmēn zuótiān yèlǐ dōugàn-le xiē shénmenǐ bù xiǎngxiángxì tīngtīng ma

hello we yesterday at night all do-PERF some what you not think detailed listen-PART

“下次再听吧。”青豆说，[……]，“下次找个机会听你仔细说说。[……]

xiàcì zài tīng ba Qīngdòu shuōxiàcì zhǎo gè jīhuì tīng nǐ zǐxì shuōshuō

next again listen-PART Aomame talk next look for-CLA chance listen you careful talk

b.「ありがとう。それを聞いてほっとした」
「ねえ、私たちがゆうべどんなことしたか、詳しく聞きたくない？」
「また今度ね」と青豆は言った。そして肺の中にたまっていたもったりした空気を外に吐き出した。「いつかまた詳しく聞かせて。でも今はだめ。そんな話をされただけで、頭がぱっくりと二つに割れちゃそう」 （1Q84－1：284）

（22）a. “听听，好好听听。 （book－2：21）

tīngtīng hǎohǎo tīngtīng

listen to one's heart's content listen

b.「ほら、よく聴いて。まず最初に小さな子共が発するような、はっとする長い叫び声があるの。 （1Q84－2：36）

（23）a. 请您花点时间考虑考虑。 （book－2：31）

qǐng nín huā diǎn shíjiān kǎolǜkǎolǜ

please you spend some time consider

b. 私どもは急ぎません。ゆっくりと時間をかけて考えて下さい。悪い話じゃないんですから」 （1Q84－2：50）

(24) a. 请你好好考虑考虑。 (book－3：63)

qǐng nǐ hǎohǎo kǎolǜkǎolǜ

please you to one's heart's content consider

b.「高井さん、そろそろ不快な気持ちになってきたのではありませんか。自分が本物の泥棒のように思えてきたのではありませんか。よくよく考えてみてください。我々が問題にしているのは、そんなに大した額のお金ではありません。(1Q84－3：99)

実際、「中国語訳」と日本語の「原作」とを比較してみると、上に示した用例を見ても分かるように、中国語の動詞の畳語形は「量の縮小」を表わす、というやや単純な議論では説明がつかないもの（例えば“好好听听（よく聴く）”、“考虑考虑（よくよく考える）”のような）が少なくなく、（木村（2014）が指摘しているように）「自らの具体的な行為の実行や具体的な行為の実行を相手に促す」と解せるような用法が際立って見えるのである[27)]。

このように考えてくると、朱説では説明のつかないところが多く見られるため、若干の修正が必要になると思われる。即ち、中国語の動詞の畳語形には「量の縮小」を表すような機能は備わっているものの、場面に依存しての解釈となる。そのため、具体的な言語使用の場において使用されることになると、必ずしもそのような意味を表すわけではなく、そのような意味を表わす場合がある、ということになる[28)]。

8. むすび

本稿を閉じるに際し、これまで考察してきたことの要点を示すとともに、残された課題について少し触れておくことにする。

〈畳語形〉というと、おそらくオノマトペを思い浮かべるのが一般的であろう。しかし、本稿ではその他の畳語形を取り挙げて、諸機能について少しばかり考察を加えてきた。具体的には、日本語の畳語の機能に

ついて考える際、手掛かりとなる要因を〈複数〉・〈反復〉・〈強調〉の三つに絞り分析を行なった。

〈強調〉は、従来説のように「単語の種類によって決まる」という解釈だけでは合理的な説明が得られないため、言語を話す主体である話者にその所在を求め、即ち、〈強調〉は外界に対する話者の積極的な捉え方の反映であると解し、さらにそれには「時空数量の強調」と「様態の強調」とが存することを論じた。

指示対象の数を時間と関連付けて考えてみると、それには〈同時的〉な解釈が強くなる場合と〈継起的〉な解釈が強くなる場合とがあるが、〈モノ〉の数は両者の解釈が可能であるのに対して、〈コト〉の数は（〈実体化〉という認知操作があったとしても、その性質上）後者の解釈の方が強くなる。このような経験的事実を踏まえ、〈複数〉と〈反復〉をめぐる議論について考えてみると、そこには〈時間〉という次元をどのように扱い、またどう処理するかといった、話者の異なった認知の仕方が反映されている、ということを明らかにした。

また、安藤（1935）のいう「縮小義」について、中国語の動詞の畳語形にも類似の解釈が生じうることを示した。

今後、本稿で得られた知見を他言語と照らし合わせることにより、個別言語の特徴及び他言語との共通性をより明確にしていくことが可能になると思われる。〈複数〉の表示と関連付けて言うならば、拙論（2015a）では、日本語の「たち」と韓国語の「*tul*」の数的多寡のみに焦点を当て、日本語は「単数表現志向」であり、韓国語は「複数表現志向」である、という林（2006）や崔（1998）の議論について私論を述べた。既に触れたように、日本語の名詞の〈複数性〉を表す方法には「接尾辞の付加」と「畳語形」があるが、『1Q84』を調べた限りでは、「人々」は328例（注３参照）見られたのに対し、「人たち」は62例のみに留まっており、それの韓国語訳を調べてみると「salamsalam」のような畳語形ではなく、「salam-*tul*」が使われている。韓国語の「*tul*」はその範囲や頻度において、

日本語の「たち」より制約が緩い、という事実は否めないが、日本語の畳語形に見られるこのような数値的な「差」も視野に入れての対照言語学的な考察が必要になると思われる。

謝辞

本稿の執筆に際し，ご指導いただきました鷲尾龍一教授（学習院大学），本研究の調査にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

注

1）モノの個体性に関しては、拙論（2015a）を参照されたい。

2）数の区別は，単数と複数の二項的体系に限られるわけではない。例えば Jespersen (1924: 188) は、

The corresponding syntactic distinctions are singular and plural, which are found is most languages, while some besides the ordinary plural have a dual, and very few a trial.

と述べている。

3）『1Q84』で採集した畳語形の種類と合計数の一覧表。使用頻度の多い順に示す。

〈表.1〉畳語形の種類と合計数の一覧表

種類と品詞表示	数	16. 広々［副］	5	32. 渋々［形動］	2	48. 重々［名］	1
1. 人々［名］	328	17. 別々［名］	5	33. 細々［副］	2	49. 銘々［名］	1
2. 我々［代］	178	18. 若々しい［形］	5	34. 深々［副］	2	50. 毒々しい［形］	1
3. 時々［名］	94	19. 荒々しい［形］	4	35. 前々［名］	2	51. 雄々しい［形］	1
4. 日々［名］	64	20. 刻々［名］	4	36. 丸々［副］	1	52. 朗々［形動］	1
5. 様々［名］［副］	53	21. 個々［名］	4	37. 度々［名］	1	53. 延々［形動］	1
6. 偶々［副］	51	22. 堂々［形動］	4	38. 昔々［名］	1	54. 端々［名］	1
7. 徐々［副］	30	23. 往々［名］	3	39. 納々［副］	1	55. 星々［名］	1
8. 次々［副］	19	24. 節々［名］	3	40. 多々［名］	1	56. 千々［名］	1
9. 色々［副］	18	25. 淡々［形動］	3	41. 騒々しい［形］	1	57. 早々［副］	1
10. 隅々［名］	18	26. 近々［名］	3	42. 半々［名］	1	58. 嬉々［形動］	1
11. 黒々［副］	8	27. 月々［名］	3	43. 山々［名］	1	59. 神々［名］	1
12. 黙々［名］	7	28. 常々［名］	3	44. 各々［名］	1	60. 弱々しい［形］	1
13. 着々［副］	6	29. 家々［名］	2	45. 翌々［語素］	1	61. 猛々しい［形］	1
14. 生々しい［形］	6	30. 重々しい［形］	2	46. 汲々［形動］	1	合計＝974例	
15. 方々［名］	5	31. 口々［名］	2	47. 軽々［副］	1		

上記の品詞表示は、『日本国語大辞典 第２版』（以下、『日国２』と記す）の「反

例」（「品詞欄について」に載っている品詞表示を参照。［名］：名詞、［代］：代名詞、［副］：副詞、［形］：形容詞、［形動］：形容動詞、［語素］：造語要素、を意味する）による。

4）和語系の接尾辞の「たち、がた、ども、ら」も同様である。このうち「ら」は指示代名詞またはその語根にも付く。

5）仁田（1992：605）は、日本語名詞の〈複数性〉を表すひとつの方法として「畳語形」が存在すると指摘し、畳語形を取りうる名詞の具体例として「①我々、②人々・神々、③木々、④品々、⑤国々・村々・町々・山々・峰々・角々・家々、⑥日々、月々、年々」を挙げている。

6）例えば、安藤（193：７）は「畳音といふのは、同種の音または音節の反復・重加をいひ、畳語といふのは、同種の語の反復・重加をいふのであるが、これらは、造語上の、もしくは語法上の現象として、多くの語族の言語に認められるものである」と説明している。

7）三輪（2014：14-15）は、〈経済性〉の意味について「人間には常に正確な伝達をしたいという欲求がある一方、特に発話に関しては、身体的、精神的な惰性に向かおうとする性癖があり、これに発音器官の形状が重なって、発話の経済性を生み出し、それが言語変化の要因となる」と説明している。

8）Jespersen (1922: 404) にも関連する記述が見られる。
In fact, reduplication, be it of syllables or of consonants, generally has that character in languages. One finds it in perfective tenses, in intensive or frequentative verbs, in the plural, and in collectives. In most cases it is a reduplication of syllables,…

9）オノマトペの畳語形は（「ふらふら」のように）濁音化しないが、名詞の畳語形は（「ひとびと」のように）濁音を生ずることがある、という発音上の対照的な違いがある（窪薗（2002））。このような解釈は古くからも見られ、例えばRodriguez (1604-1608) の『日本大文典』には「複数としては同一名詞を繰返した畳語も亦使はれるが、それは甚だ上品である。繰返された語の頭にある文字は或場合に‘濁り(Nigori)’となり、或場合は濁らない。この規則はあらゆる名詞に適用されるのではなく、一部のものに止まるが、それは実例が教へるであろう」（土井（訳），1955：308）と記述されている。

10）〈反復〉と〈継続〉については、蜂矢（1998：33）は「「反復」と「継続」とは、一つの動作とそれに続く同じ動作とをそれぞれ個別的なものと見るか、連続的なものと見るかの違いであり、「反復」の連続は「継続」にほとんど異ならない」と述べており、両者を截然と分けられないということを示唆しているが、「コトの数」に関わるのは「反復」であるため、本稿では「反復」のみを取り上げる。

11）この他に、角岡（2007：90）は名詞の反復（例えば、「人々」など）の意味は「複数であることを表す」と述べており、また窪薗（2002:17-18）は「反復語は一つの意味単位を繰り返すことによって語を作り出す方法で、複数や強調の意味を表すことが多い。「人々」は「人」の複数形であり、「広々」と言えばいかにも「広い」という感じが伝わってくる」と説明している。

12）金田一（1988：68）は「「山々」のような形も、本来は複数を表わす形ではないが、結果として複数を表わすことになる」と述べており、やや消極的な立場をとっている。

13）蜂谷（1998）から借用した用語である。

14）この点と関連し、角岡（2007：90）は「「くろぐろ」のように、形容詞や形容動詞の語基を反復すると、様態の強調になると同時に言語表現が生き生きとしてくる語感が付加される」と説明している。

15）念のため、〈複数〉と〈反復〉について、いくつかの辞書の記述を確認しておきたい。取り挙げる辞書は以下の4冊である（『新明解』は『新明解国語辞典』の略称）。

〈表.2〉辞書の記述

	〈複数〉	〈反復〉
日国2	①二つ以上の数。 ②文法で、ある名詞または代名詞の表わす人や事物がただ一個だけのものでないこと。	同じことを繰り返して行うこと。
広辞苑	①二つ以上の数。 ②(plural) おもにヨーロッパ諸語の文法で、名詞または代名詞が二つ以上の人や事物を示す場合にいう称。	くりかえすこと。たびたびすること。
岩波	①二個以上の個数。 ②事物や人の数が二つ（あるいは三つ）以上であることを表わす文法形式。	繰り返すこと。
新明解	①二つ以上の数。 ②〔英語・ドイツ語・フランス語などの文法で〕二つ（二人）以上を表わす言葉と、それに応じた文法形式。	何度でも繰り返すこと。

上記の辞書の記述では、〈複数〉と〈反復〉の語釈には、共通の意味は見られず、異なる意味として捉えている」ということは容易に見て取れよう。

また、〈複数〉に関して付け加えておきたいことが一つある。一般に〈複数〉と言えば、同じカテゴリーに属する〈二つ以上〉の個体を指すといわれ、それは上記の国語辞書の記述からも見て取れよう。しかし、そのような解釈は、あくまでも〈一つ〉のものと区別するための概念的な基準にすぎないため、そのような客観的な基準に囚われてしまうと、十分な考察ができなくなりかねない。この点と関連し、例えば池上（2000:140）は〈数〉という文法的範疇を有している言語においても「〈単数形〉を使うか〈複数形〉を使うかというのは、対象の数が〈一〉であるか〈二以上〉である

かという客観的な状況との対応で決まってくるのではなく、話し手が対象をどのように捉えるか」という主体的な営みが関わっていると述べている。

16）因みに、『日国２』の「同質」の意味記述を見ると、「二つ以上の物事や人などの性質、実質が同じであること」を表すと記述されている。

17）橋本（1978：７）は「日本語やアイヌ語で「おじさんたち」といったら、それは、三人のおじさんであることもあるが、ふつうは、おじさんとその家族や友人のことである」と述べており、「たち」の〈近似複数〉的なはたらきについて触れている。

18）Jespersen (1924: 190-194) は〈複数〉を“normal plural”と“plural of approximation”とに分類しており、池上（2000:164-168）はそれを踏まえて、「たち」の〈同質複数〉や〈近似複数〉の働きについて分析し、「たち」は〈近似複数〉が本質であると述べているが、その指摘には少し考えるべき問題がある。この点について、拙論（2015b）にやや詳しい議論があるので、参照されたい。

19）例えば「たち」に関しては、金田一（1988：69）は「日本語の複数形について注意すべきことは、複数であることを示したい時だけ「たち」をつけて示すということである。示したくなければ「たち」をつけなくてもいい。「学生が大勢歩いている」で十分で、いちいち「学生たちが大勢いる」と言う必要はない」と述べており、同様の見解は大江（1972:749）、玉村（1986:５-６）にも見られる。

20）日本語名詞の場合は、このような使い方が可能な語は限られているため、非生産的・非規則的であり、この点で生産的・規則的である和語形接尾辞と異なりが存する。

21）用例の出展：Quirk, R. et al. (1985) A Comprehensive Grammar of the English language, London.

22）中国語の畳語の定義に関しては、様々な記述がなされており、以下にいくつかを取り挙げておく。王（1955：156）は「凡叠字而不成爲兩個詞結合稱爲叠字；凡叠字亦即叠詞者、稱爲叠詞」（重畳されてできたものが、二つの語基に分解できない結合なら「畳字」、分解できる結合なら「畳詞」と呼ぶ；筆者訳）と述べ、丁（1979：226）は「重叠一个字或两个字造成一个詞、叫做重叠式」（一つ或は二つの語を重ねることによってできる語を「重畳形」という；筆者訳）と述べている。また、朱（1982：25）「重叠指的是象“妈妈、看看、个个、清清楚楚”一类词的构造方式、“妈妈”是由“妈”重叠而成的。我们說“妈”是“妈妈”的基式、“妈妈”是“妈”的重叠式」（重畳というのは“妈妈［お母さん］、看看［ちょっと見てみる］、个个［一つ一つ］、清清楚楚［はっきりしている］”のようなたぐいの造語法を指す。“妈”は“妈妈”が重畳されてできたものである。そこで、“妈”を“妈妈”の基本形と呼び、“妈妈”を“妈”の重畳形と呼ぶ（杉村（訳），1995：22-

23）と説明している。この点と関連し、『现代汉语』（2003:198）には、「语素重叠所构造的词的意义同单个语素的意义一样」（形態素を重ねた構造の単語の意味は、その形態素単独の意味と同じである（舟部（訳），2004：176）という記述も見られ、形態的には日本語と同様であるが、意味的には差が見られる。

23）この他に「試み」を表す場合もあると指摘しており、それぞれの例を一つずつ抜粋し以下に示す（日本語訳は杉村（1995：82-83）による。下線は引用者）。

時量：他退休以后，平常看看书，下下棋，和老朋友聊聊天，倒也不寂寞。（朱，1982：67）

彼は退職後、普段はちょっと本を読んだり、ちょっと将棋を指したり、ちょっと仲間と喋ったりして、意外と寂しさなど感じなかった。

動量：我该去理理发了。（朱，1982：67）

私はひとつ散発に行かなければならない。

試み：这顶帽子太小了，你戴戴看。（朱，1982：68）

この帽子は小さすぎるよ、ちょっと被ってみなさい。

24）“N·J·F·A·S·A”は “New Japan Foundation for the Advancement of Scholarship and the Arts” の略字である（英語訳〈1Q84〉参照）。

25）“PART” は “PARTICLE（助詞）”、“CLA” は “CLASSIFIER（量詞）” 、“PERF” は“PERFECT（完了）”の略号である。

26）これと関連し、『现代汉语』（2003：284）は、動詞の畳語形について次のように述べている。しかし、その日本語訳を見ると、「ちょっと～」という訳が付されており、それは動詞の畳語形は「量の縮小を表す」という解釈に基づいていると考えられる（下線は引用者）。

有相当一部分动词和形容词能重叠，但是二者重叠的方式不一样。如果是单音节的，动词的重叠形式是A·B（第二个字读轻音），如“走走，看看，骑骑，想想”等；[…] 如果是双音节的，动词的重叠形式是ABAB，如“讨论讨论，商量商量，合计合计”等；[…]

大多数の動詞と形容詞は重ねる〔“重叠”〕ことができるが、両者の重ね方は同じではない。単音節の場合、動詞の重ね型〔“重叠形式”〕はAA型（二文字目は軽声に読まれる）である。たとえば“走走〔ちょっと歩く〕、看看〔ちょっと見る〕、骑骑〔ちょっと自転車などに乗る〕、想想〔ちょっと考える〕”。[…]二音節の場合、動詞の重ね型は“讨论讨论〔ちょっと議論する〕、商量商量〔ちょっと相談する〕、合计合计〔ちょっと思案する〕”のようにABAB型である。（古川（訳），（2004：260）

27）木村（2014：77）は、畳語形の動詞表現の意味は「それらの表言論的用法にある」と指摘し、①「具体的な行為または動きの実行を自ら宣言すると

いう用法」、②「具体的な行為または動きの実行を相手に促すという用法」、③「人物の一連の具体的な動きを実況報告の如くつぶさに描写するという用法」の三つの用法を提示している。

28）例えば感謝の気持ちを表わす（21a）の“谢谢（ありがとう）”のような表現について、木村（2014:77）は「そもそも動詞の重ね型が、短く、軽く、試み程度に行う動作を表すものであるなら、“谢谢！”という表現はなんとも心の籠らない、聞きようによっては無礼とさえ感じられる常套語ということになりかねない」と指摘している。

参考文献

・本文で言及した文献を「和文」・「中文」・「欧文」・「辞書類」に分けて揚げる。

［和文文献］

安藤正次（1935）「疊音・疊語の一研究－特にReduplicatio suffixa について－」，藤岡博士功績記念會（編）『藤岡博士功績記念言語學論文集』岩波書店，pp. 7-17.

池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』筑摩書房.

林八龍（2006）「日・韓両語の数表現の対照研究」『日本研究』30，pp. 315-341.

禹昊穎（2014）「東アジア諸語の発想と表現―『スル』的言語と『ナル』的言語をめぐって―」『人文』13，pp. 57-79.

禹昊穎（2015a）「東アジア諸語における〈数〉に関する発想と表現―名詞の単数と複数をめぐって―」『學習院大學國語國文學會誌』58，pp. 1-19.

禹昊穎（2015b）「複数形の用法をめぐる考察－Jespersen の “normal plural” と “plural of approximation” の分類から－」『동북아문화연구』43，pp. 249-268.

大江三郎（1972）「数と数の一致」『英語青年』117-12，pp. 21-23.

角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版.

木村英樹（2014）「“指称”の機能―概念、実体および有標化の観点から―」『中国語学』261，pp. 64-83.

金田一春彦（1988）『日本語　新版（下）』岩波新書.

窪薗晴夫（2002）『新語はこうして作られる』岩波書店.

玉村文朗（1986）「数詞・助数詞をめぐって」『日本語学』5-8，pp. 4-14.

崔朱延（1998）『日韓両言語における単・複数表現を中心とした「表現構造」の対照考察』韓国外国語大学校大学院修士論文.

仁田義雄（1992）「日本語名詞の数概念の表示について」『文化言語学－その提言と建設－』三省堂，pp. 608-593.［仁田義雄『日本語文法研究序説－日本語の記述文法を目指して－』くろしお出版，1997，pp. 107-122 に再録］
橋本萬太郎（1978）「性と数の本質」『月刊　言語』 7 - 6 ，pp. 2 -12.
蜂矢真郷（1998）『国語重複語の語構成論的研究』塙書房.
松本克己（1993）「『数』の文法化とその認知的基盤」『月刊　言語』10-22，pp. 36-43.

［中文文献］

王力（1955）『中國語法理論　下冊』中華書局出版.
丁声树（1979）『现代汉语语法讲话』商务印书馆.
朱德熙（1982）『语法讲义』商务印书馆.［杉村博文・木村英樹（訳）『文法講義―朱德熙教授の中国語文法要説―』白帝社，1995］
北京大学中文学系现代汉语教研室（编）（2003）『现代汉语 重排本』商务印书馆.［松岡榮志・古川裕（監訳）『現代中国語総説』三省堂，2004］

［欧文文献］

Corbett, Greville G. 2000. *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.
Jespersen, Otto. 1922. *Language: Its Nature, Development and Origin*. George Allen & Unwin, London.［市河三喜・神保格（訳）『イェスペルセン言語』岩波書店，1927．三宅鴻（訳）『言語（上）』岩波書店，1981］
Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin, London.［半田一郎（訳）『文法の原理』岩波書店, 1958; 安藤貞雄（訳）『文法の原理』（上中下）岩波書店，2006］
Jespersen, Otto. 1925. *Mankind, nation and individual from a linguistic point of view*. H. Aschehoug; Cambridge: Harvard University Press.［須貝清一・眞鍋義雄（共訳）『人類と言語』岡書院，1932；『人類と言語　改訂増補』荻原星文館，1944］
Martinet, André. 1962. *A Functional View of Language*. Oxford: Clarendon Press.［田中春美・倉又浩一（訳）『言語機能論』みすず書房, 1975］
Martinet, André. 1970. *Éléments de linguistique générale*. Libraire Armand Colin, Paris.［三宅徳嘉（訳）『一般言語学要理』岩波書店, 1972］
Rodriguez, P. João. 1604-1608. *Arte da Lingoa de Japam*. Nagasaki.［土井忠生（訳）『日本大文典』三省堂出版，1955］
Sapir, Edward. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace and Company, New York.［安藤貞雄（訳）『言語―ことばの研究序説』

岩波書店, 1998］

［辞書類］

秋元美晴（2005）「複合語」，日本語教育学会（編）『新版日本語教育事典』大修館書店，pp. 241-243.
石井正彦（2007）「畳語」，飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺（編）『日本語学研究事典』明治書院，p.171.
亀井孝･河野六郎･千野栄一（1996）『言語学大辞典』第６巻，術語編．三省堂.
新村出（2008）『広辞苑 第六版』岩波書店.
中国社会科学院语言研究所（2005）『现代汉语词典 第５版』商务印书馆.
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（2009）『岩波国語辞典　第７版』岩波書店.
日本学術振興会（1997）『文部省 学術用語集 言語学編』丸善.
日本国語大辞典第二版編集委員会，小学館国語辞典編集部編（2000）『日本国語大辞典　第二版』小学館.
北京外国语学院《中英辞典》编集委员会（1979）『汉英词典』商務印書館香港分館.
［北京外国语学院《中英辞典》编集委员会『中英辞典』東方書店，1979］
山田忠雄（他）（2012）『新明解国語辞典 第七版』三省堂.

［用例出展］

・用例引用の際、末尾に〈　〉で示した「略号」を用いて出典を表記する。

村上春樹（2009）『1Q84 – BOOK 1』新潮社.　〈1Q84- 1〉
村上春樹（2009）『1Q84 – BOOK 2』新潮社.　〈1Q84- 2〉
村上春樹（2010）『1Q84 – BOOK 3』新潮社.　〈1Q84- 3〉

［中国語訳］

施小炜 译（2010）『1Q84 – BOOK 1 （４月－６月）』南海出版公司.〈book- 1〉
施小炜 译（2010）『1Q84 – BOOK 2 （７月－９月）』南海出版公司.〈book- 2〉
施小炜 译（2011）『1Q84 – BOOK 3 （10月－12月）』南海出版公司.〈book- 3〉

［英語訳］

Rubin, Jay and Gabriel, Philip. 2012. *1Q84*, Vintage books, London.　〈*1Q84*〉

About the Functions of Reduplicated Words

WOO, Daeyoung

Research into the repetition of a sound to create a single word, that is reduplicated words, has focused mainly on the consideration of onomatopoetic words and word forms. This study, however, expands the scope of the research beyond this familiar territory.

After reviewing previous researches, and analyzing reduplicated words in Japanese, the primary factors that serve as clues for reduplicated words are narrowed down to the following: Plurality, Iteration and Emphasis. These three factors are examined based on the examples drawn from *"1Q84*" by Haruki Murakami, to show that it is possible for Emphasis category to have a subordinate category. While for the categories of Plurality and Iteration, it has become clear that the difference in whether to consider the time dimension is deeply concerned to understand the meaning.

Ando (1935) says reduplicated words have a Contracting function, and this is seen in Indonesian language family, too. This paper shows that an explanation similar to Ando's idea of Contraction function is also seen in Chinese language.

（日本語日本文学専攻　博士後期課程３年）